

平成6年5月6日

暮らしと憲法とのかかわりについて考える

## 豊島区憲法記念のつどい

作家 澤地久枝氏を講師に迎え、講演会を開催

6日、豊島区民センター(東池袋1-20)で、恒例となった『豊島区憲法記念のつどい』が開催された。今年で19回目。

豊島区では、昭和51(1976)年以来、暮らしと憲法とのかかわりについて考える機会にしようと、毎年、各界から講師を招いて講演会を開催している。

今年のテーマは『誇り・希望・祈り』。講師は、「妻たちの二・二六事件」や第33回菊池寛賞受賞作「滄海よ眠れ〜ミッドウェー海戦」などのノンフィクション作家の澤地久枝氏。

「今年は、戦争が終わって、仏教で言えば50周忌に当たる年です。この間、日本人の戦争死を一人も出さず、日本人が戦争で外国人を一人も殺していません。これは世界的にも希有なことです。このことは絶対に大切にしなければならないのです」と話し始めた澤地氏は、「今、憲法第9条の改正を目指す改憲派の政治家が前面に出てきている」という状況の下で、「憲法が一定の歯止めになってきたのは事実ですが、憲法があるから軍隊を持たないのではなくて、また憲法があるから戦争がないのではないのだということ。さらには、半世紀経過しても戦争の傷を引きずっている日本から、戦争には軍人も民間人も区別はない、殺し合っているだけでは答は出ない、どんなに時間がかかっても、平和的に解決するのだということ、世界に働きかけることが私達の誇りにすべきことだと思います」と、自身が訪ねたニューギニアに今だに帰れない遺骨がある事実を紹介しながら訴えた。さらに、「徴兵のない世の中が、どんなに住み良いかを考えて欲しい。軍隊は人間の心を歪め、人間を歪なものにしてしまう。かつての戦争で、どれだけ多くの人の血が流され、今の状況が獲得されてきたのかを、次代に語り伝えていかなければなりません」と結んだ。

会場は300人を超える区民らの熱気に包まれたが、あくまでも戦争に反対し非暴力で貫く澤地氏の話に聞き入り、会場のあちこちで頷く姿が見られたのが印象的だった。

また、講演終了後には、日本最後の清流と言われている高知県四万十川を舞台にした映画「四万十川」(恩地日出夫監督)が上映された。

問合せ 総務課 総務係